

郷土かみのかわの歴史・文化財

人物から見た上三川の歴史 田村仁左衛門吉茂

明治時代に近代国家の仲間入りを果たした日本。急激な近代化を果たすことができたのは、その下地が江戸時代にできていたからと考えられています。それが、江戸や大阪といった政治経済の中心地だけではなく、広く地方にまで及んでいたことを示すものがあります。それは「農書」です。

「農書」とは、風土に根ざした農業技術を体系的にまとめ、教訓として残したものです。その内容は、土壌、作物の品種・栽培、肥料、農業労働等について幅広い分野にわたり、単に経験のみではなく、幕末には科学的見地にに基づき分析されたものもあります。この「農書」の先駆けとなったのは、1697（元禄10）年に農学者宮崎安貞が編纂した「農業全書」であり、地方的性格を脱した農書として、多くの人々に影響を与えたものでした。

その影響を受けた一人として、田村仁左衛門吉茂があげられます。吉茂は1790（寛政2）年に下蒲生村に生まれました。寺子屋での勉強は好きではなかったようですが、農業は非常に好きだったようで、実際に、「薄種・薄植」を生み出す契機となった苗代が猪によって荒らされた事件は、吉茂が13歳の時の出来事でした。31歳の時に家督を受け継ぎ、50歳までの19年間、家長として農業に打ち込み、自得農法を実践し成果を上げ、そして、隠居してからは、農書の執筆を始めたのです。

吉茂の数ある著作の中で代表作といえるのが『農業自得』で、土・肥料・気候を詳細に観察し、耕作帳に記帳することを通じて得られた経験をともに記述されています。観察↓考察↓実験↓確認という過程をふまえ、穀作はどれくらいの間隔で植えたらよい

か、畑作ではどの作物とどの作物を輪作すべきかなどを記しています。こうした経験の蓄積により、肥料の効果を落とさず、作物成育期間をぎりぎりのところまでつめた輪作体系が工夫され、限られた土地を最大限に利用した集約農業が実現・定着したのです。

秋田藩の国学者としても著名な平田篤胤も、「農業自得」を高く評価するなど、農書の中でも非常に価値の高いものです。田村仁左衛門吉茂の類まれなる観察力がこの本を生み出したのに間違いはありませんが、関東の一農村にも萌芽していた、このような科学的知見が、明治の近代化を支えたといっても過言ではないのです。

明治時代		江戸時代													西暦	年号	できごと																			
1877	明治10	1871	明治4	1866	慶応2	1863	文久3	1854	安政元	1853	嘉永6	1852	嘉永5	1851	嘉永4	1846	弘化3	1841	天保12	1833	天保4	1821	文政4	1808	文化5	1805	文化2	1803	享和3	1790	寛政2	1697	元禄10	宮崎安貞が「農業全書」を作成する。		
																																				田村仁左衛門吉茂が生まれる。
																																			吉茂、苗代が猪によって荒らされたことにより、薄播き・薄植えの自得農法を生み出す契機となる。	
																																			幕府、関東取締出役を新設。	
																																			吉茂、祖父と伯父から算術を学ぶよう奨められるが断る。	
																																			吉茂、父吉昌より家督を受け継ぐ。	
																																			吉茂、この年と、天保7年の大凶作に際し、薄播きが好結果を生み出し、 <small>（平田篤胤に強い農法であるとの確信を得る。）</small> また黒羽藩士鈴木武助の「農書」を読み、宮崎安貞の「農業全書」を読み救荒対策を計ることを教えられ、農書への関心を強める。	
																																				吉茂が「農業自得」を著す。
																																			吉茂が「農業心得草」を著す。	
																																			江戸の書林知新堂より「農業自得」が板行される。	
																																			浦賀沖にペリー率いる東インド艦隊が、アメリカ大統領の国書をもって来航。	
																																			日米和親条約締結。	
																																			吉茂が「吉茂子孫訓」を著す。	
																																			吉茂が「田村吉茂遺書」を著す。	
																																			吉茂が「農業自得附録（初稿本）」を著す。	
																																			吉茂が亡くなる。	